

〔名著再読〕

猪木正道 著『ロシア革命史 社会思想史的研究』

(白日書院、一九四八年)

富田 武

はじめに

猪木正道教授（一九一四—二〇一一）は、京都大学教授、防衛大学校長、青山学院大学教授を務め、長きにわたって保守論壇の重鎮をなした著名な政治学者である。しかし、教授がかの「平賀肅学」（一九三九年）で追われた河合栄治郎東京帝国大学経済学部教授の門下生だったこと、卒業後三菱信託株式会社に就職し、財団法人三菱経済研究所出向中に敗戦を迎え、一九四六年二月に成蹊高等学校（旧制）教授に就任したこと、四九年四月新制移行に伴い成蹊大学教授に就任したが、八月には京都大学に転任したことはあまり知られていない。右著作が教授の「処女作」であり、成蹊在任中に書かれたことも同じく知る人は少ない。

本稿は、猪木が一般には保守派とみられ、しかし弟子たちには河合を継ぐ「戦闘的リベラリスト」と呼ばれた思想的立場を、右著作の読解を切り口に明らかにしようとするものである。評者はロシア・ソ連史を専門としており、先

の最終講義「日本のソ連史研究と私」(本誌第八〇号)で猪木に言及した関係からも、いつかは猪木論を書こうと思っていたが、生誕百年のこの機会にとりあえず「再読」を試みることにした。なお、本書は後述のように、左翼の強い刊行当時ほとんど無視され、後には猪木の学問的出発点がロシア革命史であったことも忘れられ、わずかに和田春樹が「東の江口(朴郎)、西の猪木」の対比の中で「当時としてはかなりの水準の研究」と評価したくらいで、『歴史学研究』一九九〇年一月)、長らく軽視されてきたものである。

### 本書の構成と概要

本書の篇別構成は以下の通りである。

#### 第一章 序 言

#### 第二章 ロシアの後進性

##### 1 後進性の原因

##### 2 ツァーリズム

##### 3 ナロードニキ

##### 4 ロシア資本主義

#### 第三章 ボルシェヴィズム

##### 1 プレハーノフ

##### 2 原始マルクス主義

- 3 カウツキーとベルンシュタイン
  - 4 レーニン主義
- 第四章 ツァーリズムの苦悶
- 1 日露戦争
  - 2 第一次革命
  - 3 第一次革命(続)
  - 4 ストルイピン時代
- 第五章 十月革命
- 1 第一次世界大戦
  - 2 第一次世界大戦(続)
  - 3 二月革命
  - 4 四月テーゼ
  - 5 ボルシェヴィーキ政権
- 第六章 世界革命
- 1 憲法制定会議
  - 2 ブレスト・リトヴスク
  - 3 内乱

## 4 コミンテルン

## 第七章 一国社会主義

## 1 新経済政策

## 2 五箇年計画

## 3 第二次世界大戦

## 第八章 結 言

内容をやや詳しく紹介しよう（本書の表現で、評者がパラフレーズした箇所もあるが、論旨は変えていない）。第二章では、一八六一年の農奴解放後も農奴制が「厳存」し、人口の大多数を占める農民の殆んどが文盲だったこと、一九世紀末からの急速な資本主義化にもかかわらず、米英独等の先進国とは大きなギャップがあったことを指摘している。この後進性の歴史的背景として、他民族に侵略されてきた欧亜に跨がる国土を統一するためには専制が必要だったこと、その専制はビザンチンの、さらにはアジア的な伝統を継ぐもので、西欧に近代文明をもたらした人文主義や宗教改革とは無縁だったことを挙げている。ピョートル大帝に始まる西欧化も、農奴制を維持するもので西欧のような市民階級を生み出さず、アレクサンドル二世による農奴解放をはじめとする改革は「誤魔化し」「欺瞞」であった。そこから進歩的な貴族階級の子弟による、ミールを母体とする社会主義をめざし、専制を打倒しようとするナロードニキの運動が生れた。ナロードニキは皇帝暗殺のテロルでツァーリズムを脅かしたが、ロシアの資本主義化によって自らの運動の根柢を失った。資本主義化はたしかに急速に進んだが、ロシアのブルジョアジーは外国資本に依存し、

ツァーリズムに従属する弱さを持っていた。他方プロレタリアートは農奴制の残存ゆえに低い賃金・生活水準に置かれ、改善のための闘争は官憲によって弾圧されたから、いきおい革命的にならざるを得なかった。

第三章では、まずブレハーノフが取り上げられる。彼はナロードニキを批判し、ロシアでも資本主義発展が「墓掘り人」プロレタリアートを生み出すのであって、ミール社会主義が幻想であること、個人テロルは階級による革命にとって代えられないことを主張して「ロシア・マルクス主義の父」と呼ばれた。しかし、そのブレハーノフのマルクス主義は「ドイツ社会民主党によって俗流化された似而非革命理論」に他ならなかった。猪木によれば、マルクス、エンゲルスは一八四〇年代にヘーゲル哲学と古典派経済学を批判する中から人間の疎外からの解放の理論を打ち立て（「原始マルクス主義」）、四八年革命の試練を経て、六〇年代以降『資本論』等の著作によってこの革命理論を経済学的に根拠づけた（「科学的社会主義」）。カウツキー主義は、ドイツ資本主義発展に伴う労働者階級の「小市民化」を背景に、「原始マルクス主義」の革命精神を放擲し、「科学的社会主義」に寄りかかって資本主義の自動崩壊を待機する理論だったのである。ところが、レーニンは一九〇五年革命前後に、ロシアのカウツキー主義者たるメンシェヴィキと論争し、当面の革命を、ブルジョアジー主導ではなく、労働者・農民による民主主義革命（ツァーリズム打倒）とするユニークな理論を打ち出した。農民を革命の主体に加える点でも、少数精鋭の職業革命家の政党をめざす点でも、ナロードニキの伝統を引き継いだ。「マルクス主義のロシア化」に成功したのである。

第四章では、まず日露戦争が一八九〇年代の資本主義発展と外交政策に遡って論じられる。ロシア帝国主義のフランス等に対する従属的性格と周辺地域に対する侵略的性格の矛盾は極東に集中的に現れ、日清戦争に勝利した日本との朝鮮、満洲をめぐる勢力圏争いは、イギリスを後ろ盾とする日本との戦争を招いた。戦争の敗北的進展は、二〇世

紀初頭より高まっていた労働者・農民の運動を急進化させ、ブルジョアジーの自立を促し、一九〇五年一月の「血の日曜日事件」を機に第一次革命をもたらした。戦争は八月講和条約で終結したものの、革命運動は揺らぐツァーリズムの打倒へと進んだ。イヴァノヴォ・ヴォズネセンスク（初の労働者代表ソヴィエト結成）をはじめ主要都市でストが激発し、農民一揆も頻発したため、ニコライ二世はウィッテを首相に登用し、言論、集会、結社の自由を認め、国会開設を約束する十月勅令を出させた。これにより自由主義ブルジョアジーは革命運動から離反し、労働者・農民の運動は各個撃破され、一二月のモスクワ蜂起鎮圧をもって第一次革命は終焉した。ニコライ二世はウィッテを罷免して反動的な政策に乗り出した。第一国会で政府反対党が多数を占めるとこれを解散し、ストルイピンを首相に就けて土地改革（自作農創出）と革命運動弾圧を強行させた。以降一九一二年のレナ金鉱ストまで革命運動は退潮していった。

第五章では、市場と植民地をめぐる諸帝国主義の抗争が三国同盟と三国協商の対立に収斂され（一九〇七年）、焦点がバルカンに絞られ、サラエヴォ事件を機に第一次大戦となる過程が説明される。ロシアは開戦以来、工業力弱小ゆえの武器弾薬の不足もあって、タンネンベルク戦をはじめ敗退を重ね、宮廷では親独Ⅱ講和派と協商Ⅱ主戦派の対立、ラスプーチンの暗躍も生じ、国民の厭戦気分が高まった。自由主義的ブルジョアジーは、ロシアの戦線離脱を恐れる英仏の後押しを受けて改革運動に乗り出し、民衆は「パンと平和」を求めて起ち上がった。一九一七年二月革命である。ニコライ二世は退位し、リヴォフ公の臨時政府が成立し、自由主義的ブルジョアジーが政権を握ったが、労働者・兵士ソヴィエトも並立し、しかもソヴィエト多数は社会革命党とメンシェヴィキが抑え、最も革命的なボリシェヴィキは少数派という複雑な状態であった（猪木は「三重権力」と呼ぶ）。四月にスイスから帰国したレーニンは、

憲法制定議会の招集、社会革命党及びメンシェヴィキとの協力の主張を斥け、「全権力をソヴィエトへ」を掲げ、社会主義への過渡的方策としての生産の労働者統制、大企業・銀行の国有化を主張し、ボリシェヴィキ党をまとめた。臨時政府首相はリヴォフ公からケレンスキーへ代ったものの、戦争継続政策は続けられ、そこに即時停戦を唱えるボリシェヴィキが勢力を伸ばす余地があった。ボリシェヴィキは七月事件で非合法に追いやられたが、コルニーロフ反乱ではケレンスキーが狼狽する中、先頭に立って反乱鎮圧に貢献し、両首都でソヴィエト多数を握るに至った。ボリシェヴィキは武装蜂起を準備し、レーニンが党内の動揺を抑えて、遂に十月二五日軍事革命委員会指揮下の蜂起部隊が冬宮を占領し、翌日第二回全ロシア・ソヴィエト大会で新政府即人民委員会議が選出された。

第六章は右大会での「平和の布告」「土地の布告」から始まり、ソヴィエト政権の試練として、憲法制定会議の処理、対独講和問題、協商国との関係を挙げる。まず憲法制定会議選挙は十一月一二日に実施され、社会革命党が第一党、ボリシェヴィキが第二党であったため党内で社会革命党との連立論がまたも台頭したが、これはレーニン、トロツキーが抑えた。そして憲法制定会議が一九一八年一月に召集されると、ソヴィエト政権こそが正統だとするボリシェヴィキはこれを武力で解散させた。猪木によれば、ロシアにおいてツァーリズムが打倒されたのは、それが国民の意志に基かぬ専制的支配であったからではなくして、その専制的支配が国民に土地を与えず、パンを与えなかったからであり、ソヴィエト政権は国民にその欲するものを与え得るならば、即ち「人民のための政府であるならば、必ずしも人民による政府であることを要しない」。ロシアの民主主義は「死産」だったのである。第二の対独講和問題では、トロツキーのドイツ革命を期待しての「戦争でも平和でもない」方針を、レーニンが論破して「領土を割譲しても平和」による息継ぎ方針が勝利したのだが、猪木はそこに、現実政治家レーニンと永久革命の理論家トロツキーとの違

い（のちにトロツキーがスターリンに敗れる理由）を見る。第三の協商国による干渉については、ウクライナ、ドン地方、シベリア等の反革命勢力と協商列強による支援を概観したのち、ソヴィエト政権が勝利したのは「ロシアの勤労大衆の意欲を代表し、勤労大衆に深く根を下していた」からだとする（ポリシェヴィキ政権による「第一回祖国戦争」）。その民族政策も勝利に貢献したという。たしかに、ソヴィエト政権は仮借なきテロルを実施したが、「それに必然的に伴う自壊作用から免れ、一定の限界を超えることがなかったのは、偏にレーニンの偉大なる人格に負うていることを忘れてはならぬ」と評価する。

第六章の最後はコミンテルンで、レーニン、トロツキーにとってロシア革命は世界革命の発端に過ぎないため、こゝに内戦・干渉戦争でソヴィエト政権が窮地にあっただけに、世界共産党＝コミンテルン結成は当然であった。しかし、彼らが最もあてにしていたドイツ革命（一九一八年十一月）は「ルーデンドルフ將軍によって上から与えられ、ソヴィエトに相当するレーテも憲法制定会議を支持するなど、ブルジョア革命に終わったのだが、それはコミンテルン結成大会の三カ月前であった。この失敗はポリシェヴィキのような革命政党が存在しないためだと考えたレーニンは、ロシア革命の戦略・戦術と組織を各国共産党に適用しようとした。第二回大会で決議された「加入二箇条」であるが、それは「ポリシェヴィイズムの強制輸出」に他ならなかった。そしてコミンテルンが第三回大会で世界革命を後景に退けて統一戦線政策（実際には社会主義戦線の分裂政策）を採用したとき、「一九二二年に解消さるべきであった」という。

第七章では、まず戦時共産主義、新経済政策の政策内容と経済実績が説明される。内戦勝利のためにとった戦時共産主義政策は国有化と価格統制を特徴とし、農工業の生産減退、労働者・農民のソヴィエト政権に対する不満を生ん



だためクロンシュタット反乱を機に新経済政策に移行した（一九二二年）。農業と中小企業に個人経営を許し、農産物の徴発を止めて現物税に代え、余剰の自由販売を認めた。それは農民の生産意欲を高め、総じて農工業生産を二六年には戦前水準に戻す効果を上げた。経済復興のためには外国貿易が再開され、資本主義諸国に承認を受けて国交を回復した。新経済政策の成功は反面、富裕層や官僚層を生み出し、社会主義建設をめぐる党内論争を引き起こした。トロッキーの社会主義建設の条件を世界革命に求める見解は、世界革命の失敗と資本主義の相対的安定の下では現実味をもたず、スターリンのロシア一国でも社会主義建設は可能とする議論が勝利したのは当然だった。スターリンは、ジノヴィエフ、カームネフとトロッキーとの合同反対派を斥けると、一転して新経済政策擁護から工業化と農業集団化による社会主義建設強行へと進んだ。第一次五ヶ年計画で鉄鋼、石炭、石油、電力の基幹部門は二倍弱から三倍弱の増産を実現し、農業の集団化も経営数で六〇%強、播種面積で七五%に達した。しかし、製品の質は粗悪であり、消費財は不足し、集団化に対する抵抗により農業生産は低下、家畜は激減して一九三二―三三年の飢饉で数百万の餓死者を出すに至った。続く第二次五ヶ年計画では消費財生産も配慮され、集団化もテンポが緩められ、ようやく一九三六年スターリン憲法（本書は三五年と誤記、第七回ソヴィエト大会が「憲法を改正する」と決議した年）で社会主義の基礎が建設されたと謳われるようになった。

この頃ソ連を脅かしたのは、満洲事変を起こした日本、ヒトラーが政権を取ったドイツであった。これに対抗するため対米国交、国際連盟加入など集団安全保障外交が進められ、同時にコミンテルンでは反ファシズム人民戦線政策が採用された（三五年）。スペインで成立した人民戦線政府に対するフランコの反乱と独伊の支援、日中戦争の勃発、そして、ドイツによる英仏の宥和政策に乗じたズデーテン地方の併合及びチェコスロヴァキア解体と、枢軸国側の攻

勢が続き、遂にはドイツのポーランド侵攻でヨーロッパ大戦が開始された(三十九年九月)。当初はドイツが圧倒的に優勢だったが、イギリス攻略に行き詰まったドイツが、不可侵条約を破ってソ連に侵攻すると(四一年六月)、米英がソ連を支援するようになり、半年後に日本が米國に奇襲攻撃を仕掛けると、文字通りの世界大戦となった。ソ連はドイツ軍の攻勢をよく耐え、一九四三年初めにスターリンググラードで勝利し、ドイツ軍を国外に押し返し、遂に四五年五月ベルリンを陥落させ、西部戦線から進撃してきた米英軍と共にドイツを無条件降伏に追い込んだ。猪木によれば、この勝利はソ連の工業力もさることながら、国民の愛國心によるところ大であり、独ソ戦は「第二の祖国戦争」であった。そして、ソ連はこの勝利で「十月革命を完成した」、つまり転覆不能な体制となったという。

### 本書の特徴、意義と資料

以上要するに(第八章の要旨でもあるが)、ロシア革命がロシアの後進性を背景に、ツァーリズムが第一次世界大戦で崩壊した好機をとらえたマルクス主義の異端(正確には、第二インター的「科学的社会主義」の異端)レーニンの指導によって実現されたこと、しかし、期待されたヨーロッパ革命は失敗し、ソヴィエト国家は後進性を帯びたまま工業化、農業集団化を強行し、マルクスの言う社会主義とはほど遠い独裁国家(経済的には国家資本主義、政治的には全体主義)になってしまったこと、それでもロシア革命の人類解放史上の意義はあり、その後の進歩も否定できず、ソ連は撲滅の対象ではなく、否が応でも共存していく相手であること、とまとめられる。欧米では比較的オーソドックスなロシア革命観であり、猪木は当時からリアリストだったと納得させられる。

本書が評価されるのは、戦後民主化期でソ連と日本共産党に対する知識人の支持が強く、正統派の「党史小教程」

〔全連邦共産党（ポリシエヴィキ）史小教程〕一九三八年）が流布していた中で、「反革命の頭目」トロツキーの理論と実践を正当に位置づけたロシア革命史として世に問うたことである。本書には一九五一年版（世界思想社）があり、「あとがき」が加筆されているが、それによれば、執筆は四六年八月だったが、出版社が見つからず、刊行が遅れた。四六年秋は、五月の食料メーデーから翌年の二・一ゼネスト（実際はGHQの命令で中止）に至るデモとストの横行期、「極左勢力が一九一七年のロシア革命に身をおいているような錯覚におちいついた」「マルクス主義のイデオロギー的独裁」の時期だけに、国際共産主義を仮借なく批判する本書が受け入れられなかったからだと説明している。この「極左勢力が：」「マルクス主義のイデオロギー的独裁」は過大評価ないし被害妄想と言うべきだが、たしかに「党史小教程」的なロシア革命観が強かった時期に、それとは異なる非マルクス主義者によるロシア革命論の出版に業界内部で抵抗があったことは十分察せられる。

本書の白眉は、一九〇五年革命期と一七年革命期のレーニンの革命思想をトロツキーのそれとの対比において分析し、浮き彫りにした点にある。一九〇五年革命期では、ブルジョア民主主義革命だからブルジョアジーに任せて待機するのではなく（彼らも幼弱だから完遂できない）、労働者が農民（後進国ゆえ多数かつ貧困）と同盟して主導するという主体的な革命論をとり、一七年四月テーゼでは、労働民主革命を「社会主義の控えの間」から社会主義革命に転化するには少なくともヨーロッパ革命の支援が必要だとする、トロツキーの永続革命論を受け入れた、これまた主体的な革命論を打ち立てたのである。この点のちに、私の師である深内謙の『現代社会主義の省察』（一九七八年）で知られるようになるが、当時としては斬新な解釈であった。また、さすがに思想史研究者だと思わせるのは「原始マルクス主義」評価の箇所、猪木はヘーゲルやフォイエルバッハを読み込んだ上でマルクス、エンゲルスを理解し

ており、スターリン批判（一九五六年）以降の疎外論の「発見」や「初期マルクス」評価を先取りしたものと云うことができる。数少ない書評の中で、竹内好が「感動した」部分である（『読書倶楽部』一九四九年二月）。

もとより、今日の研究水準、とくにソ連崩壊後に歴史公文書がアクセス可能になってロシア・ソ連史研究が進んだ現状からすると、多くの問題点があることは否めない。労働者・農民の生活や運動、メンタリティに言及していないというのはいらないものねだりだが、ミールを「農村共產体」としながら、定期的な土地の均等割替という内容を説明していないこと、ナロードニキを「国粹人民党」と訳すのはミスリーディングであること、総じて民族問題の扱いが小さく、過小評価していることなどに不満が残る。また、アレクサンドル二世の改革が「欺瞞」だったと決めつける点、対独講和問題ではブハーリンの「革命戦争」論もあって斥けられたことに言及しない点、内戦期の赤色テロルにはレーニンが歯止めをかけたとする点（自筆のコサック村焼討ち命令などがソ連崩壊後に機密解除）、内戦にソヴェト政権が勝利したのは「ロシアの勤労大衆の意欲を代表し、勤労大衆に深く根を下していた」からだとする点（辛うじて勝利したのは、国民の帝政及び農奴制復活よりはましとする消極的支持と愛国心のため）など、予断や思い込みも散見される。

しかし、評者にとって最も気になるのは、「党史小教程」に代表される正統的なスターリン史観を批判したはずの本書が、それと意外にも共通する点を孕んでいることである。それは「指導者史観」（革命運動や新社会建設を指導者の思想と政治的リーダーシップで説明する史観）ばかりではない。ロシアのアジア的専制の伝統、ロシア資本主義の農奴制を残しながら先進国の資本を導入した独特な発展構造、ロシア帝国主義の「軍事的・封建的性格」等により、ロシア革命は「マルクス主義のロシア化」に成功したレーニンによってしか実現されなかった（スターリンによって

しか継承されなかった」という一種の必然論に読めるのである。そんなことはないと泉下の（カトリック信者ゆえ天国の）猪木に怒られそうだが、コミンテルン、ドイツ共産党の簡単な（率直に言えば、粗略な）扱いや西欧マルクス主義のその後（ローザ・ルクセンブルク以降）に言及がないことから判断すると、ロシアは西欧的な発展の道（産業革命、市民革命、民主主義の成熟）を辿れず、社会主義革命による暴力的近代化の道しかなかったのだと読めるのである。

なお、猪木は本書に満足したわけではない。右「あとがき」では、自著の欠陥を率直に指摘している。第一に、革命前のロシア史が余りにも手薄である。第二に、ポリシェヴィキ以前のロシアの革命思想が殆んど無視されている。第三に、ロシア革命とアジアの植民地・半植民地における「反帝・民族解放運動」との連関を正しく評価していないと。第二の点では、ナロードニキについて書きはしたが、マサリクの『ロシアの歴史・宗教哲学』も読まずに書いたことを恥じている。この著作に導かれてドストエフスキーの諸著作を読み、その思想こそロシア思想を理解する上で鍵であり、マルクスの最大の批判者でもあることを学んだという。第三の「ロシア革命がアジアの民族問題に対して、いかなる意義を有するかを、わたくしは充分理解することができないでいた」という反省は、中国革命の成功（一九四九年）をふまえてのことである。

ところで、歴史家としての評者にとって、もう一つ関心があるのは、猪木がいかなる先行研究をふまえ、どんな資料を用いて本書を執筆したかという点である。「はしがき」によれば、河合の一九三五年の演習でドイツ社会民主党の第一次大戦時の戦争協力政策を勉強し、これを批判したポリシェヴィキの戦争反対政策に興味を覚えて、翌年の演習でロシア革命をテーマに選び、爾来「今日まで断続的に」研究し、一九四六年夏に本書をまとめあげたという。

「断続的に」というのは、三七年三月卒業と同時に結婚、四月に三菱信託に就職して以降のブランクを指すものと見られる。河合門下生による青日会（青年日本の会）や後継の河合研究所にも出入りはしていたものの、仕事と家庭（四五年九月までに三女一男誕生）に忙しく、しかも戦時体制下ではソ連研究は不可能だったからである（満鉄調査部は例外）。

実際、本書末尾の参考文献にはマルクス・エンゲルス全集、レーニン全集、スターリン「レーニン主義の諸問題」、『全連邦共産党史』（いわゆる「党史小教程」）、トロツキー『ロシア革命史』（ドイツ語版）、A・ローゼンベルク『ロシア革命史』（ドイツ語版、一九三二年）しか挙っていない。本書の材料は、先の「あとがき」によれば、「在学中から書きとめておいたノート」とのことだが、それを見られない以上、他に何を讀んだかは不明である。当時は欧米でも客観的なロシア・ソ連研究は困難であり、ましてや天皇制国家日本の戦時体制下ではロシア語文献入手さえ不可能だった。本書は思想史的研究だから可能だったとも言えるが、それでも、ソ連という国の現実に對する感覚を養うことなしに歴史書は書けないと、少なくとも実証史家の評者には思える。

この感覚を身につけたのは、第一に、師の河合から一九三二年一月に十日間ソ連に団体旅行に出かけた印象を後に聞いたためだと思われる（もちろん、自由な旅行ではないが、お仕着せの見物の中でも河合は批判精神を働かせたに相違ない）。猪木本人は書いていないが、A・ジツドの、率直な観察でソ連からは激しく非難された『ソヴェト旅行記』（邦訳一九三七年）も読んでいたと思われる。第二に、四三年に三菱経済研究所に向向してから參謀本部による委託研究（ドイツの継戦能力の分析）の関係でロシア語を習い、政府機関紙『イズヴェスチヤ』を何とか読めるようになっていたことも大きい。むろん、同紙はプロパガンダ色が強かったが、その「裏を読む」ことを猪木はしたは

ずである（本人は、外交報道の多い同紙から、「大本営発表的な」日本の新聞には報道されない大戦中の米英の動向を知り得たと述べている）。また、その機会に在外公館からの電報を読んで東ヨーロッパに進撃したソ連軍による「上からの共産化」の実情を知り得たことも、ソ連認識を助けたに相違ない。

### 猪木は戦闘的リベラリストか

さて、ここからは本書をやや離れて、当時の猪木の政治的・思想的立場を見ておきたい。彼は、一九四六年十一月、木村健康、土屋清、石上良平、関嘉彦ら河合門下生と「社会思想研究会」を設立した。同会綱領には、①人間性の尊厳重視、人格の完成、②個人の自由の、団結の自由のような社会的自由を含めた最大限の伸張、③社会主義社会の実現、④民主政治の擁護、社会主義の議会政治を通じた実現、⑤世界平和の維持、国家主権の制限と国際連合の強化、が記されている。①はいかにも河合門下生らしく、総じて理想的平和主義、穏健な社会主義を志向していると見られる。

猪木は、ある講演で次のように語っている。「新憲法は占領下にできましたので、『誰が作った憲法か』などいって、けなす人がありますが、これはとんでもない心得違いだと思います。誰が教えてくれたのでも、よいものはいいのです。あの憲法の根本精神、なにかんづく基本的人権の考え方は、五千年の人類文明がきずきあげた偉大な遺産です。この遺産を拒絶すれば、私たちは野蛮人におちるよりほかにありません。平和主義と軍備放棄も、いささかあつものにこりて、なまさを吹く感がありますが、根本的には正しい方向を指しています…」（『日本の方向―反動に抗して』所収）。

それでは社会主義については、どうか。猪木は「社会民主主義の使命と運命」という論文の中で、民主自由党（吉田茂）と共産党（四九年一月の総選挙で三五議席に躍進）という二つのエセ民主主義に対抗して闘えと、社会党に反省と奮起を促している。猪木によれば、第一の敵は民自党だが、それは同党が「非近代的な暴力の支配網」を基盤としているからである。このあたりは、友人の丸山眞男（同年生まれ）とも通じ、また師の河合が軍国主義と共産主義と、二つながら闘ったことを受け継いでいる。社会党は当時、稲村・森戸論争で知られるようにマルクス派と社会改良派に分かれていたが、猪木は「社会民主主義の墮落」という論文で、森戸の社会主義は民主党（鳩山一郎）の修正資本主義や国民協同党（犬養毅）の協同主義とどう違うのかと批判し、この意味での社会民主主義の「墮落」を非難している。日本では社会主義とは看做されない「社会民主主義」も、いわば手垢にまみれた「社会主義」もやめて、より明確な「民主社会主義」を採用してはどうかと提言する。一九六〇年に右派が民主社会党を結成する以前に「民主社会主義」をいち早く唱えたのである（著作『民主的社会主義』は同年刊行）。

その猪木が立場を微妙に変えたのは、自伝等によれば一九五三―五四年である。西ドイツに留学し、社会民主党の変化を観察したこと（五九年には、階級政党を放棄し、マルクス主義と決別したバート・ゴテスベルク綱領に結実）、西ドイツが共産主義の脅威の最前線にあると実感し、五四年に再軍備に踏み切ったのを目の当たりにしたことが大きいと思われる（オーストリア社会党のマルクス主義からの転換も）。当人はまた、この頃（五四年に保安隊は自衛隊に改組）左派社会党の「非武装中立」論に対して、自衛権は持てるとする新憲法の芦田修正的・佐々木惣一的解釈が正しいと判断するに至った。

その後の猪木を細かくフォローすることはしないが、民社党結成のときにはすでに同党と距離を置くようになった。



六〇年安保闘争後の論壇では、むしろ国際政治学者として、アイデアリスト（丸山の弟子、坂本義和ら）対リアリスト（自分の弟子、高坂正堯ら）の論争において後者の立場に立ち、前者を「空想的平和主義」と難する論陣を張った『世界』に対抗して『中央公論』で。一九七〇年時点では『改革者』（民社党）にも『諸君』（『サンケイ新聞』系）にも寄稿していたが、この年、中曽根康弘防衛庁長官に請われて防衛大学校長に就任した（七八年まで）。その途中の七四年（社会思想研究会解散の年）に、『正論』にも執筆するようになった。さらに、一九九二年には『讀賣新聞』憲法問題調査会の会長に就任し、後の「讀賣憲法草案」の土台を築いている。

新憲法「平和主義」の擁護から「空想的平和主義」批判への変化は、政治的・思想的立場の明白な変更である。しかし、猪木がどこまで自覚していたかは定かではない。「讀賣憲法調査会」第一次提言について言えば、憲法前文にある国民主権や第九七条の基本的人権が歴史的に獲得されたものであることの指摘、「平和主義」について英語では「敗北主義」に近いニュアンスだという註釈などは、会長猪木思想を反映したものであろう。本人はもとより、復古主義や反動は大嫌いである。しかし、戦後政治・思想の変動に応じて保守論壇の大御所としてかつがれてきたことはたしかである。それに、ナチズムと共産主義を「全体主義」として批判する論者は、制度としては優れている民主主義も、現実には政官財のエリート（ライト・ミルズの言うパワー・エリート）支配でしかないことに対する無自覚に陥りやすい。それを自覚して「永久革命としての民主主義」を唱えた丸山に比して、猪木（博士論文を公刊したものが『独裁の政治思想』一九六一年）には、その自覚が弱いように思われる。

リベラリズムの神髄は「権力からの自由」にあるはずなのに、リアリストとしては「権力への参画」の誘惑に抗し得なかったということなのか。あるいは、持ち前の「愛国心」（二・二六事件の反乱部隊鎮圧以来抱き続けた昭和天

皇に対する尊敬の念と不可分)によって政策提言をするようになったのか。それは措くとしても、松井慎一郎が河合と猪木とともに「戦闘的リベラリスト」と評するのは妥当なのか。評者には少なくとも、河合が軍国主義、ファシズムに対してより戦闘的だったのに対し、猪木は共産主義、マルクス主義に対してより戦闘的だったように思われる。

【初期の主要文献】

- ・ 「暴力・ファシズム・共産主義」『中央公論』一九四八年十二月
- ・ 『共産主義の系譜』みすず書房、一九四九年
- ・ 「社会民主主義の使命と運命」『中央公論』一九四九年四月
- ・ 「社会民主主義の墮落」『朝日評論』一九四九年八月
- ・ 『ドイツ共産党史―西欧共産主義の運命』アテネ新書、一九五〇年
- ・ 「ソヴェト民主主義とソヴェト全体主義」『讀賣評論』一九五〇年七月
- ・ 『三つの共産主義―レーニン、トロツキー、スターリン』養徳社、一九五一年
- ・ 「赤色革命政策」『中央公論』一九五一年四月
- ・ 『ロシア史入門』創文社、一九五二年
- ・ 「社会民主主義と国会の保守性」『社会思想研究』一九五二年九月
- ・ 『日本の方向―反動に抗して』創文社、一九五三年

【伝記など】

- ・ 「二〇世紀の証言 猪木正道―私が戦った空想的平和主義者」『This is 讀賣』一九九九年三月
- ・ 『私の二十世紀…猪木正道回顧録』世界思想社、二〇〇〇年
- ・ 松井慎一郎『河合栄治郎 戦闘的自由主義者の真実』中公新書、二〇〇九年
- ・ 戸部良一「追悼・猪木正道 戦闘的リベラリストの生涯」『中央公論』二〇一三年一月
- ・ 松井慎一郎「河合栄治郎と猪木正道」行安茂編『イギリス理想主義の展開と河合栄治郎』世界思想社、二〇一四年